

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第5回 パラオでの戦争体験(前編)

おかやま みな こ
岡山 美奈子さん 昭和14年生まれ

私のふるさとは日本から南に3,000kmほど離れた常夏の島国、パラオ共和国です。当時、パラオは日本の委任統治領で多くの日本人が暮らしていました。父もその一人で、家族を日本に残して、農業指導員として砂糖工場やパイナップル工場などの開発に携わっていました。

パラオでの生活が安定すると、父が家族を呼び寄せ、母と兄、姉が海を渡り、その後、私と妹、弟が生まれました。私たちが住んでいた家には、青々とした芝生が広がる大きな庭があり、家の周りやヤシ林の間には、マンゴーやパイナップルなどが植えられていました。これらの果物をいつもおやつ代わりに食べていたことが忘れられません。母は真っ白なブラウスに黒いスカートをはき、よく甘い洋菓子を作ってくれました。休日には船で島々を巡り、バーベキューをして楽しみました。

しかし、満ち足りた生活は続かず、次第に戦争の影が濃くなり、米軍の偵察機が空低く飛ぶようになりました。

常夏の島国に戦争の影が迫る

私たちの住んでいた家は、日本軍の守備隊に接収され、軍事司令部となりました。敷地内には兵舎のほか、訓練所も建てられ、毎日のように戦車や兵器の操作訓練が行われていました。当時小学3年生だった兄は、学校の登下校の時、自宅の敷地内を横切るのに、番兵さんに敬礼して通行の許可を得ていたそうです。

1944年2月、日本軍の主力拠点があったトラック島が



父の徴兵前に撮影した家族写真

米軍による空襲を受けると、私たちの生活は一転しました。当時35歳だった父をはじめ、大人の男性の多くは軍隊に招集されたので、私たち家族も母一人で子どもを守ることになってしまいました。

3月30日未明にはパラオ大空襲があり、軍港や石油、食料の保管庫があったコロールという大きな町が全焼しました。この光景を、当時4歳だった私は逃げ込んだジャングルの中から見ていました。今でも耳に残る爆撃音と、すさまじい勢いで広がっていく火柱。油などが燃え上がって立ち上る煙で、空は2~3日真っ黒な状態が続きました。

それからは、日本からの食料の輸送船も来なくなりました。妹と弟は栄養失調となり、感染症になりました。今でもその時にできた大きなハゲが残っています。

戦火が一段と激しさを増し、ついに女性と子どもに本土への帰還命令が出ました。母と1歳から9歳までの私たち子どもは、持てるだけの荷物を背負い港に向けて出発しましたが、子どもたちが泣きやまず、行列からだんだん遅れて取り残され船に乗ることができませんでした。この時、母は「もうだめだ、死ぬ時は一緒で」と覚悟したそうです。そして、子どもたちに横一列に手をつながせると海へ入っていきました。しかし、妹の背丈まで入ったところで憲兵に見つかり、私たちは元の家に戻したのです。

後で分かったことですが、あの時私たちが乗る予定だった船は撃沈されたそうです。もし乗っていたら、私は今、ここにいません。(後編は1月15日号で掲載予定)

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和6年12月15日号 No.1521



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは株式会社デンソーウェブの登録商標です

*本紙は12月5日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集
後記

新車を購入してから12年が過ぎ走行距離は22万5,000kmを超えました。私にとって通勤中の車の中は、音楽やラジオを聞く癒やしの空間になっています。先日、ドアミラーの開閉不良を修理してもらいましたが、そのほかに異常はなし。乗り始めた時と比べて車体の輝きはなくなってきましたが、愛着は増すばかりです。買い替えの誘惑があってもそれに打ち勝ち30万kmを目指そうと思います。

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。